

内藤湖南の瀋陽訪書調査

松 浦 章

一
内藤湖南（虎次郎、1866～1934）は、交通不便な時代にあってしばしば中国を訪問したことは周知のことである。とりわけ、京都帝国大学文科大学教授として明治45年（1912）3～5月には、

史料採集のため奉天に出張し、富岡謙蔵、羽田亨の協力を得て『滿文老檔』『五體清文鑑』を写真撮影し、四庫全書中の珍本を鈔写す。^{※1}

とあるように、現在の中国遼寧省の省都瀋陽にある故宮を訪問して、清朝史研究に極めて重要な史料となる『滿文老檔』の写真撮影を行った。

この間の史料採取の苦勞談は、帰国後、大正元年（1912）10月に刊行された『中央公論』第283号の説苑に「奉天訪書談」として掲載され、これは『目睹書譚』に収められたことも周知のことである。

しかし、内藤湖南の瀋陽での活動状況の一端を記した記録が、当時瀋陽で刊行されていた日刊の漢文版新聞『盛京時報』^{※2}（写真①）に見える。若干の紹介を試みたい。



内藤湖南が瀋陽に到着したのは、奉天に着いたのは三月の二十三日であった^{※3}。

とある。その際の旅行記である「奉天訪書日記」では、3月22日金曜の条に、

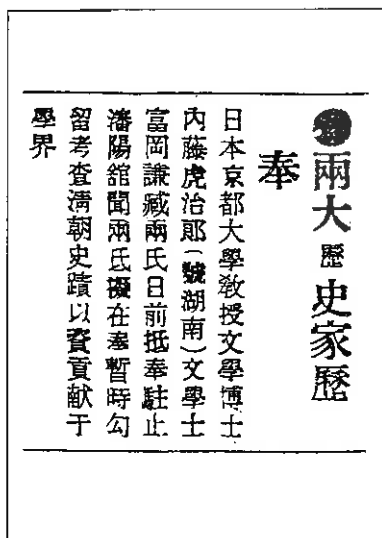
午前八時大連発 午後三時五十分奉天着・・・瀋陽館ニ投宿^{※4}

とある。

湖南が瀋陽に到着直後の『盛京時報』第1609号、明治45年3月26日（1912年）にその到着を次のように報じている。

『盛京時報』第1609号、東三省新聞 ◎奉天 ●兩大歴史家歴奉

日本京都大学教授文学博士内藤虎次郎（號湖南）文学士富岡謙蔵兩氏日前抵奉駐止瀋陽館、聞兩氏擬在奉暫時勾留考查清朝史蹟以資貢獻于學界。^{※5}（写真②）



とある。内藤湖南と富岡桃華（謙蔵、1873～1918）の二人が清朝史蹟の考察のために瀋陽を訪問したことを伝えている。

瀋陽におけるその後の活動は、到着直後から積極的におこなわれた。その経過は「奉天訪書日記」に見える。

3月27日夜、日本人倶楽部において講演を行

二
「奉天訪書談」の「奉天行の目的」によれば、

っている。

富岡氏「清朝ノ絵画」余（湖南）「奉天宮殿ノ図書」^{註6}

4月3日

此日盛京報館佐藤君ニ託シテ写生字ヲ試験ス^{註7}

4月4日には、史料を筆写するためと思われる紙を購入している。

午前、静古齋ニ至リ紙ヲ買フ写書ノ料ナリ^{註8}

三

湖南の第一の目的は、『満文老檔』、『五體清文鑑』の写真撮影にあった。その他の史料は書写する必要があり、『盛京時報』新聞社に依頼したら、写生字を募集することになったのである。

「奉天訪書日記」の4月5日の条には、

此日写生字十人来ル^{註9}

さらに4月6日条に、

昨日ノ写生字来リ写書ヲ求ムル者三人、新タニ来ル者二人^{註10}

とある。写生字が募集できたのには『盛京時報』のメディアを利用したからである。それは『盛京時報』が写生字募集の広告を掲載してくれたためであった。

湖南は「奉天訪書日記」の「写生字の同盟罷工と支那人気質」において、瀋陽故宮の文溯閣の四庫全書の一部を借り出し写字を行うため中国人を雇用している。

最初之を寫さうといふときに、どうか人はあるまいかと盛京時報の人に話すと、それは新聞に広告したら直ぐに得られる、それは此方で募集して上げて宜いと云ふことであるから、一切を盛京時報の方に任せた、で広告したところが、十人位しか要らないのに四五十人も申込んで来た。そこで試験見たやうなことをして、其中良きうなのを十人程選んだ。^{註11}

と記している。

それでは、『盛京時報』にどのような広告が掲載されたのであろうか。『盛京時報』には、この時期、湖南の仕事を補助するためと銘打っての募集広告は見られない。『盛京時報』の4月3日付け第1616号の「特別広告」に並んで「招募写生字数名」の記事があり、

一、来盛京時報試験 一、按字数給薪 一、期限約一個月（写真③）

第 一 千 六 百 一 十 七 号

招募寫生字數

一、來盛京時報試驗
一、按字数給薪
一、期限約一個月

煙臺通信

とある。『盛京時報』社において写生字を募集し試験して採用し、写字数で給与を与えること、期間が一ヵ月程であることから、湖南の希望する写生字に関してであったことは明白である。さらに、翌4月4日の第1617号には、「特別広告」と並び「招募書手截止」の記事中に、

日昨由本館考驗書手、現已足額、茲將中選名字列左、均於初五日、早九点、来館面商一切。先覺 長民 吳勇 榮昌 李繼唐 胡懷民 王者玉 鳳壽臣 焉炳東 泉 永 本館白（写真④）

(七) 第 一 千 六 百 一 十 七 號

招募書手截止

日昨由本館考驗書手現已足額茲將中選名字列左均於初五日早九點來館面商一切

先覺 長民 吳勇 榮昌
李繼唐 胡懷民 王者玉
鳳壽臣 焉炳東 泉 永
本館白

來件

とある。写字生の募集による人選が決定し、決定した一〇名の名前が列記された。

『盛京時報』にはこの両日を除いて前後数日間においても同様な記事は見られないこと、しかも、「奉天訪書日記」の5日の記事「此日写字生十人来ル」とあることとも一致することから、この両日の写字生に関する記事が、湖南の仕事のために掲載された広告であることは明白である。さらに湖南の「奉天訪書日記」には写字生の名が見ず、4日の記事によってその名が判るのである。

採用された写字生の給与は千字三十銭であったが、安いと言うことで辞めてしまったのであった。^{※12}その内の一名のみが残って、他の者が加わり、五名で十三日程のあいだに予定の執筆を完了している。^{※13}筆写し終わったのは四庫全書にのみ存する『礼部志稿』をはじめとして百六七十巻冊にして六十八冊になった。^{※14}写字生の監督を行ったのは富岡氏であった。^{※15}写字生の中には毎日の給与の支給を希望した者があり、「七八十銭から一円五十銭位の額を勘定してやる」^{※16}と湖南が記していることから、一人一日当たり二千数百字から五千字を筆写したことになる。

四

羽田亨氏(1882~1955)は、湖南等に遅れること十余日で瀋陽に到着している。4月8日に「朝羽田氏来着奉天駅ニ迎フ」^{※17}とある。羽田亨氏は瀋陽滞在期間は湖南等に比べ短かったが、

帰国後に大変な仕事待ちかまえていた。湖南は「写真の方は帰つてから羽田君が毎日学校へ出て整理をして居る」^{※18}と、瀋陽での湖南が撮影した写真の整理であった。その数は「九千六百枚」^{※19}にものぼっていたからである。

今日のような便利な写真機も無い時代に、撮影する方も、原板から現像する方も大変な仕事であったと思われる。交通不便なコピー機も無い時代に困難を省みず、史料の収集に尽力した湖南等の努力には敬服せざるを得ない。

注1『内藤湖南全集』第14巻、筑摩書房、1976年7月、665頁。

注2『盛京時報』は1906年(光緒三二)9月1日に創刊され日本人が経営主であった新聞である。

注3『内藤湖南全集』第12巻、1970年6月、299頁。

注4『内藤湖南全集』第6巻、1972年11月、440~441頁。

注5『盛京時報』影印本 第22冊、盛京時報影印組輯印、瀋陽、1985年2月、[22] 178頁。

注6『内藤湖南全集』第6巻、442頁。

注7~9『内藤湖南全集』第6巻、444頁。

注10『内藤湖南全集』第6巻、445頁。

注11『内藤湖南全集』第12巻、315頁。

注12~15『内藤湖南全集』第12巻、316頁。

注16『内藤湖南全集』第12巻、317頁。

注17『内藤湖南全集』第6巻、445頁。

注18~19『内藤湖南全集』第12巻、317頁。

「祇園精舎」報告書が完成しました。

1. 体裁…B4版、上製本(縫ぎ表紙・ケース入り)、4分冊(邦文1464頁、英文179頁、写真図版308頁、附図15枚・FD2枚)、本文上質紙、写真図版アート紙
第1分冊(本文編I)

調査の経過、調査の意義と考古学的環境、基本土層序と文化的時期、遺跡各地区の調査成果など、700頁
第2分冊(本文編II)

出土遺物、自然科学的調査、地理学・文献学的調査、英文報告など、943頁

第3分冊(図版編)

遺構写真190頁・遺物写真118頁など約1400点、ダブルトーン印刷

第4分冊(附図編)

遺構平面・土層断面全体図などA全判大~A1判大
図面15枚、遺構・遺物番号表などをFD2枚に収録
2. 頒価11万円(税込)。

お問い合わせは出版部まで(06-368-0236)



祇園精舎僧院跡の発掘調査風景